ふじのくに芸術祭 2024（第 64 回静岡県芸術祭）文学部門文芸コンクール審査員寸評

【創作】

小説 17・児童文学7の応募であった。小説は実に多彩な分野に跨って、社会の断片、家族の在り方、歴史ものと皆さんそれぞれの拘りの小説観を垣間見た。児童ものも同様、小説とは違う、子供たちへの励ましある作品が評価された。但し両部門ともに文章作法に欠けるものもいくつか。気になるのは例年のことである。（大原　興三郎）

【エッセイ】

随筆 14 点、評論6点はいずれも、しっかりとした主題を持ちそれぞれの理論や思いを訴える力作ばかりでした。イスラエルやウクライナの戦争拡大を反映してか、戦争を知る世代（直接間接を問わず）が切々と平和の大切さを訴える作品も多く、印象に残りました。評論、随筆ともに自分の言葉で表現する大切さを痛感した審査でした。（小長谷　建夫）

【戯曲・シナリオ】

今年の応募作は、戯曲2編、シナリオ8編でした。どの作品も個性とバイタリティがあふれており、佳作揃いであったと思います。戯曲・シナリオの魅力の大部分を占めるのは「言葉」です。どんな言葉が書かれているかより、むしろどう書かれているかが大切なのです。タイムリーな題材、奇想天外な展開も楽しませてくれますが、「言葉」を自分の感性と体験をもって紡いだ作品に尊敬、そして素晴らしさを感じます。

（立石　光博）

【詩】

入賞・入選作には多彩な詩の光があり、実りの年でした。色彩から展開される断章に時代の批評性と痛みが光る詩、赤ちゃんとあやす者の情景に祈りがこめられた詩、虫を外に逃がす奮闘と妻との共同がユーモラスに描かれた詩、夢の情景が現実回想につながる詩、戦時回想に少女との交流を刻印した詩、など、タイプの違う持ち味の共演です。（佐相　憲一）

【短歌】

本年度の応募者数は 66 名、昨年度と比較して3名の微増でした。作品については、対象への眼差しにそれぞれの色合いと厚みを感じられる佳作が多く、読み応えがありました。長い時代の流れの中で社会も生活も変化しますが、日本に日本語のある限り、短歌は私たちの身を流れる詩型であり続けることでしょう。（竹内　典子）

【俳句】

俳句部門の今年の応募数は 85 編でした。昨年比、8編の減でした。年齢別では 70 代が 38 編、80 代が 29 編。と全体の約 80%を占め、俳句の傾向としては全国と同様です。コンテストに挑戦することは、五句一組という物語を描くことであり、季語の働きや配列、物語の山谷を考えることに繋がります。自分の句を高め、力のあるものにするため、また格の高い句を作るために挑戦しましょう。（間島　あきら）

【川柳】

今年の応募は 47 件と、昨年を下回る応募者数となり、少し寂しい結果となりました。さらに、時事をテーマにした作品が少なく、物足りなさを感じました。一つのテーマをいろんな切り口で5句で表現することはかなり難しいことですが、来年以降はベテランの奮起を望みたいと思います。（石川　柳寿）